

令和7年度山形県環境審議会第1回野生生物・自然環境部会 議事録

1 日時 令和7年9月4日（木） 13時30分～15時30分

2 場所 山形県庁1002会議室

3 出席者等（敬称略）

（1）出席委員及び特別委員

委員：横山潤、梅川信治、江成はるか、大西尚樹、齋藤潔、鳥羽妙、野堀嘉裕、渡辺理絵

特別委員：東北農政局農村振興部長 鷲野健二【代理：農村環境課長 田中和博】

東北森林管理局長 箕輪富男【代理：山形森林管理署長 添谷稔】

東北地方整備局長 西村拓【代理：環境調整官 樋川満】

東北地方環境事務所長 東岡礼治【代理：次長 濱名功太郎】

（2）事務局

山形県環境エネルギー部

みどり自然課長	木内 真一
課長補佐（野生生物対策担当）	佐藤 実
主査	澤 菜瑠美
主事	金 誉大
主事	高谷圭一朗
主事	奥出 姫乃

4 議 事

（1）開 会

（2）課長挨拶

木内みどり自然課長より、部会開催に当たって挨拶がなされた。

（3）部会の成立

委員総数13名のうち12名が出席しており、山形県環境審議会条例第6条第7項で準用する第4条第3項の規定により、定足数に達していることが報告された。

（4）議事録署名委員選出

議長により、議事録署名委員に梅川委員と齋藤委員が指名された。

（5）審議事項

横山部会長： 本日の議題について、山形県知事から資料1のとおり6月10日及び9月2日付けで山形県環境審議会に意見を求める諮問があったので、本日当部会で審議する。

審議事項1 東根狩猟鳥獣捕獲禁止区域の指定について（資料2）

（事務局より説明）

齋藤委員： 今回の狩猟鳥獣捕獲禁止区域の指定に当たっては、法律によると、特に保護を図る必要があると認める場合には禁止または制限するとなっており、特に保護

を図る必要があるというような視点や表現はなくて良いか。

事務局： 今回の狩猟鳥獣捕獲禁止区域というのは、基本的には鳥獣保護区であるが、農業被害や人的被害があり、一部の鳥獣が増えすぎてしまっている地域の捕獲を解禁することで適正な数に減らしていきたいといった禁止区域であり、特定の鳥獣を保護するという定義にはなっていない。

齋藤委員： 法第12条第2項で、保護を図る必要があると認められる狩猟鳥獣がある場合には指定できるという記載があるので、指定方針でそれ以外の狩猟鳥獣についてはきちんと保護する必要があるという考え方を入れるなど、法律の趣旨に則った方が良い。

事務局： 次回の指定の際には法律の趣旨に則り、他の狩猟鳥獣についても保護を図っていく旨記載をするかどうか検討する。

大西委員： 有害は認めて狩猟は禁止ということで良いか。

事務局： 狩猟は禁止されていない。狩猟鳥獣捕獲禁止区域は、従来から狩猟が禁止されている鳥獣保護区から狩猟も可能な狩猟鳥獣捕獲禁止区域であるので、対象となる狩猟鳥獣以外は、これまで通り狩猟してはいけない。

大西委員： 有害はどうか。

事務局： 有害も禁止されていない。

大西委員： 別表3について、ツキノワグマの国内指定等（国）が国内希少となっているが、イノシシ、シカも特定管理鳥獣なので記載した方が良いのではないかと。

江成委員： 東根狩猟鳥獣捕獲禁止区域は国有林か。それとも国有林以外の県有林等か。

事務局： 全て民有林となっている。

横山部会長： これまでも鳥獣保護区から狩猟鳥獣捕獲禁止区域への振替えは議論してきた。山形県第13次鳥獣保護管理事業計画の中ではこれが最後の振替えとなる。その他、特に御質問がないようであれば、諮問があった「東根狩猟鳥獣捕獲禁止区域の指定」については、答申ということでよろしいか。

各委員： 異議なし。

横山部会長： それではそのようにさせていただきたいと思う。

審議事項2 第3期山形県イノシシ管理計画の策定について（資料3）

（事務局より説明）

大西委員： 11, 12 ページに記載の被害対策実施状況とその効果について、緩衝林と刈払いは何が違うか。

事務局： 刈払いは耕作放棄地といった農地に近いところでの刈払い、緩衝林はもう少し山奥の方での人と動物のすみ分けのための対策となっている。

渡辺委員： 集計の地理的範囲が変更されているが、令和4年度以降の地理的範囲は、農業集落単位という認識で良いか。

事務局： 農業集落単位となっている。

大西委員： 2ページの推定生息頭数について、令和元年度と令和6年度の違いと、それぞれの推計値はどのように計算しているか。

- 事務局： ベイズ法を使用している。令和元年度推計は当時の推定の生息密度や捕獲の実績、令和2年度の捕獲目標頭数2,800頭から推計した数値となっている。令和6年度推計は捕獲頭数の実績や調査に基づく生息密度から計算すると表の数値となる。
- 大西委員： 令和元年度に推計した数値は将来予測、令和6年度は振り返って見たらこの数値だったということか。
- 事務局： そうなっている。
- 東北農政局： 農地周辺で捕獲を頑張っても、山側で個体数が減っていかないと被害は減っていかれないと思う。イノシシ管理計画に関する審議であるので、その整理はどうしているか教えてほしい。
- 事務局： 捕獲については担い手不足が非常に問題となっている。おそらく60代、70代の技術のある方々がいる現在が捕獲圧をかけられる一番のタイミングであり、徐々に捕獲圧を掛けられなくなることが危惧されている。そういった状況で個体数が多いところで捕れば良いが、なかなかそこにパワーを割けないことも踏まえて、捕るべきところで捕るというように考えている。
- 東北農政局： 中身的には農業被害に対する防止計画のように見えるが、そういう理解のもとで第3期のイノシシ管理計画を作成するという事で良いか。
- 事務局： おっしゃる通り農業被害防止の色が濃い計画になっている。推定生息頭数を出しているが、先に意見を聞いた特定鳥獣保護管理検討委員会において正確性がないのではないか、その中で捕獲目標を立てるのは効果が薄いのではないか、といった指摘を受けている。そういった指摘を踏まえて、まずは被害額を減らすために電気柵の設置に取り組んでいきたいと考えている。
- 東北農政局： 鳥獣被害対策交付金を農地周辺で活用したとしても個体数が減ってくとは思えないので、山側での対策を何かしらしなければ、本来目標としている姿に近づかないと考える。捕獲頭数の推計が難しいということだが、そのために調査をこうするとか、そういったことにも言及した計画とし、山側での対策実施に次の計画で取り組めるようにしてくべきだと考える。
- 事務局： 推定捕獲頭数については正確な数値を出すのが難しいので、そこにコストと時間をかけるよりは、前年と比べて増加しているのか減少しているのかといった傾向を掴んでおくというような考え方でいる。どうしても山に捕りに行くというのは、1頭当たりの単価が非常に高く効果が見えにくい。調査の件は言及されてないので全くしないように見えるが今後も継続していく。そこについては記載するようにする。
- 大西委員： 個体数管理はしなければならない。シカの管理計画でも散々意見をしたが、これは絶対だ。環境整備や被害対策と個体数管理は車の両輪だ。個体数管理をしないのは戦国時代の籠城作戦のようなもので、どんなに電気柵を2重、3重に張ったところで、周りの個体数が増えればいつか必ず決壊して大量の攻撃を受ける。数を抑えておけば、リスクや対策、捕獲にかかるお金も下がる。山形県の駆除数は2000頭前後で推移しているが、宮城県も2010年頃は2000頭前後で

数年推移して現在は1万頭以上に激増している。この状況を見ても、これから本格的に個体数が増えていくのは確実だ。捕獲者が少ないという現状はありつつも、イノシシが増えれば増えるほど、それだけ取らなければならない。確かに密度が低い現在は捕獲効率が悪くコストがかかるが、個体数が増えて捕獲効率が上がり1頭当たりのコストは下がったところで、それより何倍も取らなければならないため、結局総額としてはかかる。捕獲効率が悪くても密度が低いうちに捕っておいた方が単年の経費はかかるかもしれないが、5年10年と長いスパンで考えたときにかかる経費が違ってくる。殺されるイノシシの数も少なく抑えられる。個体数管理と生息地管理を同時に進めていかないと効果は出ない。

横山部会長： 実現可能性にこだわりたい部分もあるが、一方で理想的な状況を実現するために何をすれば良いか、資源が無尽蔵にあると仮定したときにどうすると良いかといったことも別に考えていかなければならないと思う。

鳥羽委員： 17ページのジビエの推進は農業被害対策や個体数管理と逆説的であるというのはどういうことか。

事務局： 理想はやはり鳥獣被害がなくなり個体数も適正な数に抑えていくことだと思うが、ジビエの安定的な供給は鳥獣被害対策が進んで個体数が減っていくと難しくなる。需要と供給のバランスが合わなくなっていくというところを踏まえ、逆説的な関係があると記載している。

鳥羽委員： 肉食の生き物たちにとっては、狩猟圧はある程度必要だというのは大前提としてあると思うが、その狩猟圧の中で捕られたものも有効活用するという流れは必要だと思う。山形県として推進していくのは良くないと思うが、ジビエとしてのルートも大事だと思うので違和感がある。

事務局： 昨年度から放射性物質の検査を開始し、安全性を確認しながら狩猟者の方々に情報提供を行っている。豚熱についても、ジビエをやりたい人ができるような環境整備はもちろん進めていく。ただ、それと県が推進していくというのは別問題だと考えている。

江成委員： 放射性物質の検査は、どのぐらいの個体数でどのぐらいの地域でしているか。

事務局： 県全体で35頭を計画しており、4地域で各市町村主要な地域で2,3頭と計画している。

江成委員： イノシシの放射能は減らないのと、個体差と季節差が結構大きいので、数を増やした方が良い。また、15ページで電気柵の設置距離を目標としているが、電気柵の設置距離が延びれば延びるほど、管理不十分、管理放棄の電気柵が増えていくのが実態だが、その調査は進んでいるか。

事務局： 調査は進んでいるとは言いがたい状況である。8割9割は適切に設置されていないというような指摘を受けており、県だけではなく市町村と協力しながら適切な設置について啓発、調査をしていきたい。

江成委員： 一見設置しているようでも、全く効いていないと意味がないので、そういったところの把握を進めていただきたい。17ページで湿地について今回の計画では

対応を検討するに留まっているが、ここ5年間で対応を検討しているだけでは、おそらく希少な植物がなくなってしまうと思う。今回の計画の中では、対策を実施するところまではいかないという理解で良いか。

事務局： 情報収集も十分にできていない現状があり、現時点で対策を記載できないのが正直なところ。

江成委員： ミズゴケをひっくり返してるのをよく見るので急いだ方が良い。36ページで生息状況調査は廃止とあり、業者に委託する形となったと思っていたが、これはなくなったという理解で良いか。

事務局： 他の獣種はカメラ設置するなど調査を実施していく。イノシシに関しては毎年行っているライン調査を継続的に行っていく。

江成委員： 37ページの市街地出没の項目で、クマに準じて対応するとあるが、クマは市街地出没したら9月1日から銃猟ができるようになったが、イノシシも同じく銃で対応するということか。

事務局： 法律上はイノシシも対象に含まれているので、銃によって対応することになると考えている。

江成委員： 場所によってはバックストップがなく撃てないところもあると思うので、そういった場所に出没したときの対応も検討した方が良い。

渡辺委員： 15ページの管理目標の優先度は、何の優先度か。予算措置なのかマンパワーなのか補助事業なのか、どのように理解すると良いか。

事務局： 今年度イノシシの捕獲に係る予算を大幅に増額していることから、捕獲の力を緩めるというつもりはない。捕獲ばかりがフォーカスされていた前の計画と比べたときに、どのように見せていくかといった視点を入れているため15ページのような表現となったが、予算を縮小していくといったわけではないので、次回に向けて整理して示せるようにしたい。

渡辺委員： 17ページに捕獲優先地域とあるが、この地域はどのくらいの地理的範囲を言うか。

事務局： 想定では市町村単位としている。

渡辺委員： 捕獲優先地域での捕獲を重点化とあるが、優先地域に選ばれなかった地域はどういう対応となるか。

事務局： 捕獲を進めても鳥獣被害対策に反映しないと思っている市町村がある一方で、電気柵だったり刈払いをすると、被害の減少につながると思っている市町村が多く、そこをまず取り組むのが先だというのを示していきたいので、こういった記載となっている。まずは農地周辺の被害対策に取り組んでほしいというイメージを持っている。

渡辺委員： 庄内北部はイノシシが最上川を越えてきており、被害の初期ステージに入ったとみなされ、被害対応が他の地域と同じくスタートしてるわけではない。今の捕獲優先地域の考え方は、すでに被害が生じている自治体を対象としているが、そもそも被害の発生時点が異なっている。庄内北部はこれから被害が深刻化し始める段階となっており、そういったところの支援が後手になるのではと

危惧している。

大西委員： 15ページの管理目標は（１）の目標の達成のために（２）～（４）があり、同列ではない。計画の目的は、農林業、生活環境及び人身被害の軽減を図ることを目的とし、（１）を実現するために（２）～（４）を実行するという整理となるのではないかな。

事務局： その通りだと思う。

大西委員： 31ページの狩猟免許所持者数を削除するのはなぜか。

事務局： イノシシに限ったことではなく、他の獣種にも関係している部分なので、定量的な数字を出すのはどうかといったこともあり削除した。

大西委員： 他の獣種にも関わることであれば、他の獣種の計画にも記載すれば良いのではないかな。削除すると議論するデータがなくなってしまうので、出せるデータは全て出すのが大事だと思う。

農作物被害について、一度減った後、令和６年度は増えている点については豚熱が収まり、個体数が増えてきていることを記載した方が良い。

個体数が増えていくと、長期的に見ると必ず被害は増えていく。生息推定の精度が低いからこそ調査を続け、低い精度のもとでプランを立て、PDCAを回していく。調査を続けることで今回の計画が終わる最終年度にまた検討ができる。

事務局： トrend把握に努めるというのは、あくまでも調査は継続して数値は追っていくが、それを絶対の指標にしないということ。１万２千頭から１万８千頭とぶれが大きい中で捕獲頭数を決めるのではなく、調査の精度はtrend把握に努め、捕獲数も増えているtrendであれば捕獲を強くしようといったイメージで決めていきたいと考えている。

大西委員： 目標設定は何を根拠に設定するか。

事務局： 令和元年度や日々の推計によって、３,６００頭から３,７００頭くらい捕獲していきと下げtrendになるということを予算を増やして取り組もうとしていたが、新しい数値はそれが既に破綻していた。そのため、生息頭数は可能な限り把握に努めるが絶対視はしない。

大西委員： 現在持っている１万８千頭以外のデータがない。１万８千頭をベースに取り組んでみて、毎年trend把握をしながら３年目にもう一度見直しを入れるといった方向性を入れるのはどうか。それで減らしすぎなのかもっと捕らなければならぬのか検討する。

東北農政局： 18ページに各主体の役割の記載があるが、取組みの内容については農業サイドの取組みと見える。今回の計画は農業サイドと環境サイドが一緒になりながら取組む計画、対策であるので、農業サイドだけにならないような形で対策を進めていただきたい。

大西委員： 豚熱の関係で、まだ日本で発生していないアフリカ豚熱を記載する必要があるか。また、マダニによるSFTSもどんどん北上してきており、シカ、イノシシが増えればマダニも増えるので、それについても記載があると良いと思う。

江成委員： 生息動向調査をしなくなり、狩猟のCPUEやSPUEで生息動向調査をするという

話であったが、最上地方や庄内北部地域といった猟友会が元気でないところの情報が上がってこないのではないかと危惧している。猟友会員の数が少ないところに対しても同じく SPUE という CPUE しか使わないという理解で良いか。思っていた以上にイノシシによる被害が多く、その情報が上がってきていないので、アンケート調査をもう少し重視するとか、目撃情報など、SPUE や CPUE が上がってこないところの情報を丁寧に集めた方が良い。

事務局： 内部で検討する。

野堀委員： 目撃情報の関係で、小さな被害情報でも県に報告すると1日時間を取られるから報告しなくなると聞いた。天気情報のように、ここで見たという情報を入力し、情報が積算されていくようなシステムがあれば、今までと全然違う情報源となるのではないか。この地域でこれくらい目撃されているといった情報が手に入るようにわかると大変好ましい。

事務局： その件はおそらくクマの目撃情報ではないかと思う。我々の集めている被害はそれほど手間を取らせていない。

横山部会長： 情報が錯そうして報告に二の足を踏むような状況は良くない。多少精度が低くても簡単に登録できるような情報の方が効果があると思う。

渡辺委員： 電気柵の延長化に関して、特に庄内北部の自治体においては、交付金の受け皿となる協議会の設置が未着手なところがある。そうすると被害が既にあるって農業者が深刻に考えているのに自治体がそれに対応しきれない状況がある。それをボトムアップとトップダウンの両方から市町村の支援をしてほしい。

事務局： 酒田市は今年から協議会を設置すると聞いている。

横山部会長： 他にも質問等あると思うが、終わりの時間も近づいてきたため、諮問があった「第3期山形県イノシシ管理計画の策定」については、御意見を踏まえ、事務局において第2回野生生物・自然環境部会に向けて検討していくということでよろしいか。

各委員： 異議なし。

横山部会長： それではそのようにさせていただきたいと思う。

審議事項3 第4期山形県環境計画の中間見直しについて（資料4）

（事務局より説明）

大西委員： 外来種に関する記載が一切ないが、記載した方が良いのではないか。

事務局： 見直しの方向性に記載していない項目についても、素案の中で触れていきたいと考えている。

大西委員： 百名山に関する記載で登山者数を要するに増やしたいとあるが、これは多様性と反している。

事務局： 令和2年度の策定当時も様々な意見があったと聞いている。当時、令和3年度に全国山の日全国大会が予定されていたという背景もあり、利用に特化した目標を設定したという背景があった。利用に傾いた目標を引き続き挙げていくことが良いのかどうかも含めて、再度検討していきたい。

渡辺委員： 獣害被害対策の体制整備のために中間支援組織とあったが、中山間地域の集落の現況を鑑みると中間支援組織の検討を迅速に進める必要があると考える。

事務局： 鳥獣被害が年々深刻になってきていると認識している。長い時間かけて結論を出すテーマではないと考えており、既に市町村と協議会は立ち上げているので、可能な限り早く実現できるよう取り組んでいきたい。

大西委員： 「農作物被害と生活環境被害が中心である鳥獣被害対策に生物多様性の維持の視点・対策を盛り込む」という記載は、先ほどの奥山では積極的にイノシシを捕獲しないという点と矛盾する。

事務局： 御意見を踏まえて対応していきたい。

横山部会長： その他、特に御質問がないようであれば、諮問があった「第4次山形県環境計画の中間見直し」については、御意見を踏まえ、事務局において第2回野生生物・自然環境部会に向けて検討していくということによろしいか。

各委員： 異議なし。

横山部会長： それではそのようにさせていただきたいと思う。

(6) その他 特になし

議事録署名人

議	長	横山	潤
議事録署名委員		梅川	信治
議事録署名委員		齋藤	潔